

幸福に必要な条件と 年齢・性別

豊田 尚吾 *Written by Shogo Toyota* ● 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究員



はじめに

本稿ではエネルギー・文化研究所(以下、CEL)が行った、生活意識調査のデータの中で、幸福に関する設問の分析を行う。幸福感をどう取り扱うかについては、様々な議論があり、安易な判断を行うことは適切ではない。そのことに関しては別稿で論じているので、それを参照していただきたい(※1)。

そもそも、幸福感という、人によってとらえ方の違う概念を数値化し、それを改善させるための条件を考えたとき、そこに何らかの規則性や構造が存在するのだろうか。そのような問題意識から、第1節では幸福感を感じる条件の重要性について検討している。なお、この質問の基礎となり関係も深い、回答者の社会問題に対する関心や生活充足度に関しては、紙幅の都合上、取り上げる余地はなかった。これらに関しても、CELのウェブサイトでディスカッションペーパーの形で検討を行っている(※2)。

第2、3節では、幸福度という主観的指標を、回答者の年齢(階層)別および性別のデータ分析を行っている。第1節の応用として、どのような条件を満たすと、結果的に幸福感が増しているのかについて、年齢層別(一部、性別)に確認を行い、その特徴を明らかにすることを試みている。

結果として、全ての人に共通する重要な要素として、家庭の状態の影響力の大きさが明らかにになるとともに、若年者が身近な周囲への配慮や調和を、中高年齢者が社会性、自己実現、健康といった要素に影響されている可

能性を確認した。また、男女での違いも明らかにしている。

最後にこれらの結果を基に、ミクロの評価指標としての幸福感の可能性について考察を行う。

① 幸福感

それを感ずるための条件とは

本節では、CELが行った生活意識調査のデータを用いて、幸福感を感ずるための条件について考える。利用する設問としては、まず「全般的にみて、現在あなたは幸せですか」という問である。選択肢は「1…とても幸せ」「2…幸せ」「3…どちらかといえば幸せ」「4…どちらともいえない」「5…どちらかといえば不幸せ」「6…不幸せ」「7…とても不幸せ」の7つである。

次に、「あなたにとって、幸福感を感ずるためには何が重要だと思いますか」と問い、11の選択肢の中から、「最も重要なもの(2つ以内)」「その次に重要なもの(2つ以内)」「またその次に重要なもの(3つ以内)」「あなたにとって重要なもの(いくつでも)」の4つに分けてもらった。いずれにも選ばれない要素は「重要とはいえないもの」ということであるから、実際には5つに分類されたデータが得られることになる。

11の選択肢は表1の通りである。

これに加え、「以下の項目について、あなたの実際の実感をお答えください」とも聞いている。項目は表1と同じであり、「とても実感できている」「まあ実感できている」「どちら

表1 幸福感を感じるために重要だと思うもの

自分自身の健康が良好である (あるいはよい方向に向かっている。以下同じ)
家族・知人の健康が良好である
お金がある
よい家庭が築けている
近隣との関係が良好である
友人関係が良好である
仕事での人間関係が良好である
社会から評価されている
よい社会だと納得できる
自分自身がこうありたいと思っているような自分である※
自分の大切だと思っている人が幸せである

※自分が成長している、何かを成し遂げた、成し遂げようとして
いるという実感も含む

ともいえない」「あまり実感できていない」「全く実感できていない」の5つの選択肢を提示している。

各回答者は性別、年齢、ライフスタイルその他のデータも回答している。これらを用いて、幸福実感の要因や、幸福の条件の属性別特徴などを検討し、今後の幸福研究に役立つ結果を得ることができれば望ましい。最終的にはCELのミッションである、持続可能な社会における、生活者が幸福感を増大させる施策を提示することが最終的な目標である。

1 幸福度の分布

まず、幸福度の分布を見てみよう。同様の設問として、毎年行っている「生活満足度」との関係を見ると興味深い。表2を見ると、幸福度と生活満足度は強い相関関係がある一方、幸福度の方が生活満足度よりもややよく評価されていることが分かる。

つまり、生活自体の満足度は充分とはいえないが、幸せかどうかと聞かれると生活満足度よりも少し上目に答えるケースが多いというのである。実際、生活満足度と幸福度が一致している回答者は全体の45.5%であるのに対し、幸福度が生活満足度を「上回っている」回答者が47.1%と、それよりも多い。因みに、生活満足度が幸福度を上回っている回答者は全体の7.4%にすぎない。

生活に不満はあるけれども、幸せか不幸かといわれれば、幸せと答える。幸せの本質的な特徴(総合性や多様性)が、ここに表れているといえないだろうか。生活満足度も充分総合的な指標であるものの、それでも幸福感という全体性と比較すると部分性を残しているということであろう。

そして、幸福度が上ブレする理由は、基礎的な生活資源がある程度満たされているという実感から来るのではないだろうか。例えば自分や家族の「健康」である。これは衛生要因的項目で、(健康で)ないと非常に不幸であるという実感に直結するが、健康である場合にはそれが当たり前となってしまう、ありがたみを忘れがちになる。つまり、プラスアルファの喜びにつながりにくい。生活満足度という問われ方では、その当たり前の健康はあまり意識されないが、改まって幸福度を聞かれた場合には、影響力のある評価要因が変わってくるのではないだろうか。

以上のことはあくまで仮説であるが、いずれにせよ、生活満足度と幸福度の自己評価は高い相関を持ちながらも、後者が前者を上回りがちであるという、興味深い事実を発見することができた。

2 幸福に必要な条件(項目のランキング)

次に、幸福感を感じるために重要な要因について全体像を見た後、個別にも確認していく。まず「自分自身の健康が良好である(あるいはよい方向に向かっている)」といった11の条件項目に対し、それが「最も重要なもの」「その次に重要なもの」「またその次に重要なもの」「重要なもの」「重要とはいえないもの」のいずれに分類したかということを次ページ図1にまとめた。

季刊誌「CEL」93号の「CELTOPICS」でも述べたが、仮に各項目の選択率

表2 幸福度と生活満足度との関係

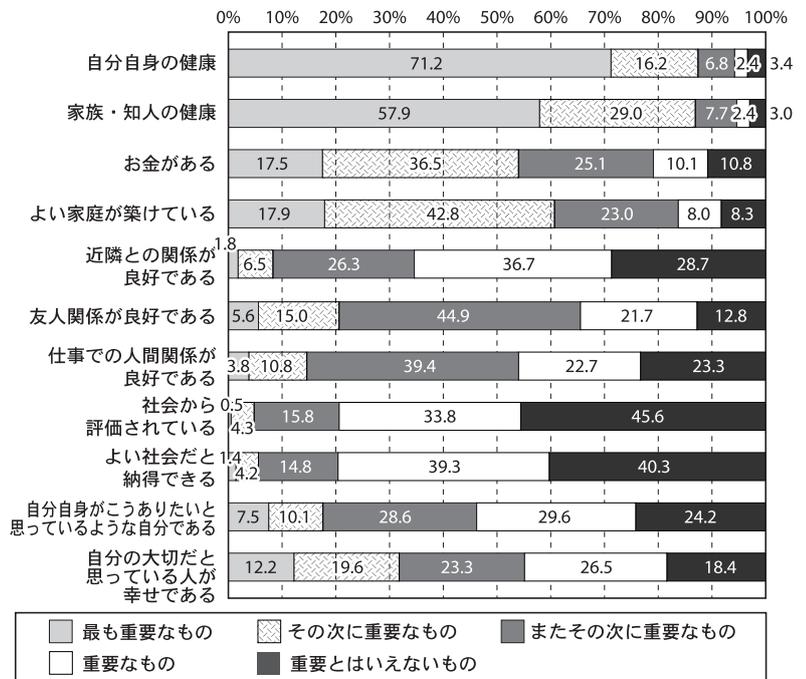
	幸福度							合計
	とても幸せ	幸せ	どちらかといえば幸せ	どちらともいえない	どちらかといえば不幸せ	不幸せ	とても不幸せ	
非常に満足	11	4	3	1	0	0	1	20
満足	36	136	37	0	0	0	0	209
どちらかといえば満足	21	166	276	24	2	1	0	490
どちらともいえない	1	32	136	85	10	1	0	265
どちらかといえば不満	1	15	62	28	17	3	0	126
不満	2	3	9	18	5	2	0	39
非常に不満	0	3	3	7	3	3	8	27
合計	72	359	526	163	37	10	9	1176

※欠損値(無回答)があるため、合計は1182人にならない

幸福度 > 生活満足度

幸福度 = 生活満足度

図1 幸福感を感じるために重要な条件



計が50%を超えた時点を、その項目の評価と考えると、「自分自身の健康」と「家族・知人の健康」は「最も重要なもの」の時点で既に全体の50%を超えている。「その次に重要なもの」を加えると、「よい家庭が築けている」「お金がある」が50%を超え、「またその次に重要なもの」を加えた場合には「友人関係が良好である」「自分の大切だと思っっている人が幸せである」「仕事での人間関係が良好である」が基準を超える。

「重要なもの」には残りの「自分自身がこうありたいと思っっているような自分である」

「近隣との関係が良好である」「よい社会だと納得できる」「社会から評価されている」が入る。「重要とはいえないもの」に該当する項目はなかった。

やはり、健康という基本的な衛生要因は、幸福に不可欠であるということが改めて確認できる。健康の次に、よい家庭（愛情）、お金という項目が選択されるのも妥当性がある。その次のカテゴリーには、人間関係が選ばれている。自己実現や社会的評価、公正感などは、重要ではあるが優先度は高くはないという結果となった。

回答者が本音を語ってくれているという前提のもとではあるものの、健康、愛、お金、人間関係、自己実現、社会的評価という重要性のランクが得られた。個々人の幸せは多様であるが、社会全体の幸せを考える場合には、このランキングは参考になる。

同時に、指標化の難しさもそこから見て取ることが出来る。健康やお金の指標は社会全体としての評価を数値に変換することが可能かもしれない。しかし、愛情や人間関係といった項目は多くが合意できるような指標化が困難であるように思う。とはいえ、個人の幸福度の分析という意味では有用な情報であるといえるのではないだろうか。

2 年齢階層別の幸福に必要な条件

11の条件項目の選択に関し、年齢層が異なれば生活状況や価値観も違うため、回答も異なるのではないかと考えた。そこで、年齢階層別の「幸福の条件」を確認してみた。結果として、性別という要素も加味した方がよい場合もあったので、必要に応じて男女の違いも考慮しながらデータの内容を検討していく。

「自分自身の健康が良好である（あるいはよい方向に向かっていく。以下、同じ）」は11の条件の中で最も重視された項目である。これに関していえば、相対的には若年者よりも40代以降の中高齢者が「最も重要」と評価する割合が多い。年を取るにしたがって、健康不安が大きくなることを考えれば、妥当な結果といえるだろう。

「家族・知人の健康が良好である」も、自身の健康に次いで重視された項目である。しかし、20代の男性が「最も重要」を選択する率が相対的に低く、これは統計的に有意であった。女性の場合には30代、40代の「最も重要」選択率が高く、20代、60代以上は低かったが、統計的には有意ではなかった。因みに男性の場合には40代が「最も重要」を選択する率が高く、次いで60代以上の選択率も高くなっている。

「お金がある」は逆に20代層の「最も重要」選択率が高く（25・1%）、60代以上の層が低かった（9・6%）。60代以上層は「重要とはいえない」の選択率が19・5%もある。高齢者の生活価値観が現役時代から大きく変わっていることを示唆しているようだ。とはいえ、高齢者であっても最低限のお金は生活のために必

要であることを考えると、ある程度金銭面で安定した暮らしを享受できている姿も同時に想像される結果といえる。

「よい家庭が築けている」に関しては、男女合計値も、それぞれについても年齢で統計的な有意差は確認されなかった。数字上は20代層がやや軽視、30代層がやや重視となっているが、統計上は誤差の範囲を超えていない、と判断された。実は、この項目のみが年齢階層別差異が確認されなかった。その結果、次節以降、重要な役割を演ずることになる。

「近隣との関係が良好である」は、全体的にはあまり重視されなかった項目である。その中で、60代以上の高齢層が重視し、20代、30代層が相対的に軽視している。これを「最も重要」と選択した回答者は全体の1・8%にすぎないが、その3分の2が60代以上である。20代層の40・2%が「重要とはいえない」を選択しているが、30代層ではそれが27・0%に減る。地域コミュニティ内のコミュニケーションに近所付き合いとすると、現状と問題点が見えてくるような気がする。

「友人関係が良好である」も男性では有意な差異が認められたが、女性ではそれが認められなかった。男性では20代層が重視する一方、40代層（やや50代層も）が軽視するという結果となっている。女性も、20代層重視、30代、40代層軽視という傾向はあるのだが、統計的には有意とはいえないかった。働き盛りで、仕事や家庭のことで頭がいっぱいになる時期には、どうしても友人関係が疎遠になるであろうか。

「仕事での人間関係が良好である」もあま

り全体としては重要視されなかった。これは明らかに60代以上の関心が低い。リタイアされた方が多いことを考えれば当然の結果である。一方で20代層の関心がやや高い。中高年のメンタル面でのストレスがよく話題になっているが、それは数字上では明示的でなかった。

「社会から評価されている」は、最も幸福と関係が小さいと評価された項目である。たまた、社会的認知は人間の基本的な欲求のひとつともいえるので、もう少し違う聞き方をすると回答は変わってきたのかもしれない。このデータでいえば、今度は男性の年齢階層差が確認

表3 年齢階層別 幸福の条件

自分の健康						仕事での人間関係							
	最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計		最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計
20代	54.0	24.9	14.6	5.6	0.9	100.0	20代	8.7	13.2	40.2	24.2	13.7	100.0
30代	64.4	24.9	8.4	1.8	0.4	100.0	30代	1.3	10.3	49.4	23.6	15.5	100.0
40代	76.7	17.0	4.0	2.2	0.0	100.0	40代	3.9	10.1	50.9	20.6	14.5	100.0
50代	82.1	10.7	6.0	1.3	0.0	100.0	50代	2.5	12.7	38.1	26.3	20.3	100.0
60代以上	87.9	7.7	2.8	1.6	0.0	100.0	60代以上	3.2	8.8	22.7	20.3	45.0	100.0
合計	73.6	16.7	7.0	2.4	0.3	100.0	合計	3.9	11.0	39.9	23.0	22.3	100.0

家族・知人の健康 (男性のみ)						社会から評価 (女性のみ)							
	最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計		最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計
20代	32.0	36.0	20.0	6.0	6.0	100.0	20代	0.0	5.9	12.6	45.4	36.1	100.0
30代	58.1	29.1	6.8	3.4	2.6	100.0	30代	0.0	1.7	11.2	45.7	41.4	100.0
40代	66.9	25.4	5.1	1.7	0.8	100.0	40代	0.0	1.8	8.2	33.6	56.4	100.0
50代	59.7	25.8	9.7	3.2	1.6	100.0	50代	0.0	2.7	17.0	33.9	46.4	100.0
60代以上	63.5	26.2	8.7	0.0	1.6	100.0	60代以上	0.0	4.8	12.0	23.2	60.0	100.0
合計	56.9	28.2	9.7	2.7	2.4	100.0	合計	0.0	3.4	12.2	36.3	48.1	100.0

お金がある						よい社会だと納得 (男性のみ)							
	最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計		最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計
20代	25.1	33.3	27.9	6.8	6.8	100.0	20代	2.0	5.0	14.0	33.0	46.0	100.0
30代	18.9	36.5	25.8	12.9	6.0	100.0	30代	0.9	1.7	12.0	42.7	42.7	100.0
40代	19.3	44.7	22.4	11.4	2.2	100.0	40代	0.0	9.3	13.6	44.1	33.1	100.0
50代	16.9	36.4	25.0	9.3	12.3	100.0	50代	2.4	3.2	18.5	44.4	31.5	100.0
60代以上	9.6	34.3	26.3	10.4	19.5	100.0	60代以上	4.0	4.0	20.6	32.5	38.9	100.0
合計	17.7	37.0	25.4	10.2	9.6	100.0	合計	1.9	4.6	15.9	39.5	38.1	100.0

近隣との関係						こうありたい自分 (女性のみ)							
	最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計		最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計
20代	0.0	2.3	16.0	41.6	40.2	100.0	20代	17.6	15.1	30.3	29.4	7.6	100.0
30代	0.0	3.9	21.0	48.1	27.0	100.0	30代	8.6	14.7	32.8	25.9	18.1	100.0
40代	0.4	4.8	28.1	36.0	30.7	100.0	40代	3.6	4.5	34.5	33.6	23.6	100.0
50代	2.5	5.5	28.4	37.7	25.8	100.0	50代	4.5	10.7	29.5	29.5	25.9	100.0
60代以上	5.6	15.5	38.2	23.9	16.7	100.0	60代以上	4.8	9.6	29.6	23.2	32.8	100.0
合計	1.8	6.6	26.6	37.2	27.8	100.0	合計	7.9	11.0	31.3	28.2	21.6	100.0

友人関係 (男性のみ)						大切な人が幸せ							
	最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計		最も重要	その次に重要	またその次に重要	重要	重要とはいえない	合計
20代	14.0	22.0	34.0	14.0	16.0	100.0	20代	21.9	14.6	22.4	24.2	16.9	100.0
30代	4.3	13.7	47.9	27.4	6.8	100.0	30代	15.0	22.7	27.0	20.2	15.0	100.0
40代	0.8	11.9	39.8	29.7	17.8	100.0	40代	9.6	21.5	23.2	31.1	14.5	100.0
50代	3.2	8.1	39.5	29.8	19.4	100.0	50代	9.3	22.5	24.6	28.4	15.3	100.0
60代以上	7.1	12.7	46.8	19.0	14.3	100.0	60代以上	6.8	17.9	20.7	29.9	24.7	100.0
合計	5.6	13.3	41.9	24.3	14.9	100.0	合計	12.3	19.9	23.6	26.8	17.4	100.0

されず、女性のみ統計的に有意な差が表れた。60代以上女性の60・0%がこの項目を「重要とはいえない」と評価している。それに対して20代、30代、50代層の女性の過半数が何らかの形で重視している、という結果であった。

「よい社会だと納得できる」という項目に関しては、男性が有意な差あり、女性が有意差なしとなった。ただ実際には、あまり際だった特徴は見られず、60代以上、40代層の男性の関心がやや高い、といった程度である。「社会から評価」に次いで、全体的重視度の低い項目であるため、特徴も出にくいようだ。

「自分自身がこうありたい」と思っているような自分である」については、男性が有意差なし、女性が有意差ありとなった。20代層の女性では「最も重要」が17・6%、「その次に重要」が15・1%と合わせて30%を超えている。一方、60代以上の女性では「重要とはいえない」が32・8%と20代女性（7・6%）の4倍以上となっている。20代女性の関心の高さは、男性の各年齢層と比較してみてもやや突出しており、20代層女性を理解する上で重要な項目であるのかもしれない。

最後に「自分の大切だと思っている人が幸せである」は特に20代層、加えて30代層が「最も重要」を選択する率が高く、60代以上、50代層、40代層は低い。60代以上層に至っては、「重要とはいえない」24・7%と、4分の1近くに達しており、他の年齢層（15〜17%程度）と比べるとかなり高い。自分の大切な人をどのようにイメージするかという点で、高齢者の方々のライフステージ要因が現れている結果といえよう。

性別・年齢階層別

③ 幸福度と幸福の条件

決定木分析を用いて

幸福の条件は年齢階層によって異なることが確認できた。では、個人の実際の幸福度は、何らかの方法で判断することができるのだろうか。幸福の構造に接近するための第一歩として、どのような幸福条件を満たしている人が、結果として幸福を感じているのかということを検証してみたい。

つまり、幸福度の水準を分類する、という視点で、最も説明力のある要因を探そうということである。既に述べたように、今回の調査では、今まで用いていた幸福の条件に関して、「実際の実感」も5段階評価でデータを得ている。

この回答データを説明されるべき変数と考え、個人の実際の幸福度（7段階）を説明するために効果的な項目を抽出することを試みた。方法としては決定木分析を用いた。

前節で述べたように、「自分自身の健康」要因は、全ての項目の中で最も重要と評価された条件である。したがって、この項目の評価は、実際の幸福実感を説明するために有用であろうと予測することができる。しかし、有意な説明力はあるのだが、目的に照らして最良の要因とはいえない、という結果になった。

その理由の1つは、説明変数として必要な分散に乏しいということがある。つまり、「自身の健康」の評価は「まあ実感できている」に集中し、回答者の半数以上がこれを選択している。いくら重要でも、半分が1つの項目を選んでいる指標であると、幸福度分類のため

の説明変数という観点からは、最良とはいえず、なくなる。

1 全体分析

決定木分析によると、「よい家庭が築けている」という項目が、分類という観点から最も望ましい、という結果になった。この時点で全体が統計的に有意性の観点から、4つのグループに分けられたが、別の条件を加味することで、より差異のあるグループに分類できる。

もちろん、「よい家庭が築けている」実感が高いほど、幸福度も高くなっている。先の4つのグループで、「よい家庭が築けている」ことに對し、「とても実感できている」と回答したグループは、さらに「自分自身がこうありたい」と思っているような自分である」かどうか、という質問に対する回答によって、最もうまく再分類できる。

つまり、計算の結果でいえば、全ての回答者の中で、「よい家庭が築けている」か、という質問に對し、「とても実感できている」と回答し、かつ「自分自身がこうありたい」と思っているような自分である」か、という質問に對し、「とても実感できている」あるいは「まあ実感できている」と回答した65名のグループが、最も幸福度の平均値の高いグループとなったのである。

因みに幸福度に関し、「とても幸せ」が7点、「幸せ」を6点…、「とても不幸せ」が1点だとすると、最も幸せなグループの、65名の幸福度の平均値は6・14点であった。分布は「とても幸せ」が21名（全ての「とても幸せ」と回答し

た人の、29・2%）、「幸せ」が34名（同9・4%）、「どちらかといえば幸せ」が8名（同1・5%）、「どちらともいえない」が2名（同1・2%）、それ以下は0名である。

65名という人数が全体の5・5%にすぎないことを考えると、驚異的な”とても幸せ率”だ、ということがいえる。しかし、注意しなければならぬのは、この結果が「よい家庭が築けていて」、「自分自身がこうありたい」と思っているような自分で「ありさえすれば幸せになれる」といつているわけではないということである。

つまり、よい家庭やこうありたい自分と、他の重要項目、例えば自身の健康は無関係ではなく、関連しているということだ（実際、3つのデータにはプラスで有意な相関関係が存在する）。言い換えれば、よい家庭であり、こうありたい自分を満たしている人は、健康面でも満足している人が多いということである。

具体的にいえば65名の中で、自身の健康を「とても実感できている」「まあ実感できている」人は59人（90・8%）もいる。全体では回答者の70・2%が「とても実感できている」あるいは「まあ実感できている」人であることからも、65名の健康面での高い満足状況をうかがうことができる。

したがって、この条件抽出はあくまで、分類に資するものという意味であり、幸せそのものを構成する要因を明らかにするものではない。

以下、「よい家庭が築けている」か、という質問に対し、「まあ実感できている」と答えた表4のグループ3、4、5、6に対しては、さらに「お金がある」かどうかという質問を行うこと

よ い 家 庭
 こうありたい自分
 お金がある
 自分の健康
 家族知人の健康
 人 数 ※
 幸福度平均値
 分 散 値
 順 位

表4 幸福度の決定木分析

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5	グループ6	グループ7	グループ8	グループ9	グループ10
よ い 家 庭	とても実感できている	とても実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	まあ実感できている	どちらともいえない	どちらともいえない	実感できていない	実感できていない
こうありたい自分	実感できている	左以外	—	—	—	—	—	—	—	—
お金がある	—	—	実感できている	どちらともいえない+あまり実感できていない	どちらともいえない+あまり実感できていない	全く実感できていない	—	—	—	—
自分の健康	—	—	—	—	—	—	実感できている	左以外	—	—
家族知人の健康	—	—	—	—	—	—	—	—	実感できている	左以外
人 数 ※	65	57	149	276	166	66	159	110	67	62
幸福度平均値	6.1	5.6	5.7	5.4	5.1	4.9	5.1	4.5	4.7	3.6
分 散 値	0.6	0.8	0.5	0.5	0.4	1.3	0.6	1.0	1.1	1.3
順 位	①	③	②	④	⑤	⑦	⑥	⑨	⑧	⑩

※欠損値(無回答)があるため、合計は1182人にならない

よって、さらに効果的に分類が可能である。

同様に、「よい家庭が築けている」か、という質問に対し、「どちらともいえない」と答えたグループ7、8に対しては、「自分の健康が良好である」か、という質問が、「あまり実感できていない」「全く実感できていない」と答えたグループ9、10に対しては、「家族・知人の健康が良好である」か、という質問を行うことよって、さらに効果的な分類が可能となる。

その結果をまとめたものが表4である。これを見ると、点数で計算した幸福度の平均値は、第2の質問によつては、第1の質問結果を逆転する場合があることが分かる。例えば、とてもよい家族でも、こうありたいような自分では「あまりない」場合（グループ2）には、まあまあよい家族でお金がある方（グループ3）が、幸福の平均値は高くなる、ということである。

2 年齢階層別分析

これに対し、本稿の問題意識である、年齢階層で最初に分類してから、幸福条件を当てはめた場合が次ページの表5である。まず統計的には30代以下と40代以上に2分することが最も有意性の高い分類であることが分かる。そして20代、30代層に対しては、「自分の大切だと思っている人が幸せである」と「よい家庭が築けている」という質問が、分類に効果的であることが分かる。

一方、40代以上層に対しては「よい家庭が築けている」の満足度が高い順に、さらに「社会から評価されている」「自分自身がこうありた

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5	グループ6	グループ7
年 齢	30代以下	30代以下	30代以下	30代以下	30代以下	30代以下	30代以下
大切な人が幸せ	とても実感 できている	実感 できている	実感 できている	実感 できている	どちらとも いえない	どちらとも いえない	実感 できていない
よい家庭	—	とても実感 できている	まあ実感 できている	どちらとも いえない+ あまり実感 できていない	実感 できている+ どちらとも いえない	実感 できていない	—
人 数 ※	35	25	150	36	148	22	35
幸福度平均値	1.02	0.34	0.62	1.10	0.76	1.54	1.33
分 散 値	6.20	6.24	5.65	5.11	5.11	4.23	4.54
順 位	②	①	④	⑨	⑧	⑮	⑬

表5 幸福度の決定木分析
(年齢階層別)

	グループ1'	グループ2'	グループ3'	グループ4'	グループ5'	グループ6'	グループ7'	グループ8'	グループ9'	グループ10'
年 齢	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上	40代以上
よい家庭	とても実感 できている	とても実感 できている	まあ実感 できている	まあ実感 できている	まあ実感 できている	どちらとも いえない	どちらとも いえない	あまり実感 できていない	あまり実感 できていない	全く実感 できていない
社会から評価	実感 できている	どちらとも いえない+ 実感 できていない	—	—	—	—	—	—	—	—
こうありたい自分	—	—	実感 できている	どちらとも いえない	実感 できていない	—	—	—	—	—
自分の健康	—	—	—	—	—	実感 できている	どちらとも いえない+ 実感 できていない	—	—	—
家族知人の健康	—	—	—	—	—	—	—	実感 できている	どちらとも いえない+ 実感 できていない	—
人 数 ※	26	46	145	198	53	95	76	26	32	31
幸福度平均値	0.56	0.64	0.37	0.36	0.96	0.55	0.90	0.54	0.71	2.00
分 散 値	6.12	5.52	5.51	5.26	4.85	5.00	4.39	4.62	3.81	3.94
順 位	③	⑤	⑥	⑦	⑪	⑩	⑭	⑫	⑰	⑱

※欠損値(無回答)があるため、合計は1182人にならない

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5	グループ6	グループ7
性 別	女 性	女 性	女 性	女 性	女 性	女 性	女 性
よい家庭	とても実感 できている	とても実感 できている	まあ実感 できている	まあ実感 できている	どちらとも いえない+ あまり実感 できていない	どちらとも いえない+ あまり実感 できていない	全く実感 できていない
年 齢	40代以下	50代以上	—	—	—	—	—
お金がある	—	—	実感 できている	どちらとも いえない+ 実感 できていない	—	—	—
大切な人が幸せ	—	—	—	—	実感 できている	どちらとも いえない+ 実感 できていない	—
人 数 ※	41	24	84	239	65	113	21
幸福度平均値	0.48	0.49	0.44	0.49	0.59	0.73	1.27
分 散 値	6.17	5.58	5.81	5.37	5.26	4.64	3.67
順 位	②	⑥	③	⑦	⑨	⑬	⑮

表6 幸福度の決定木分析
(男女別)

	グループ1'	グループ2'	グループ3'	グループ4'	グループ5'	グループ6'	グループ7'	グループ8'	グループ9'
性 別	男 性	男 性	男 性	男 性	男 性	男 性	男 性	男 性	男 性
よい家庭	とても実感 できている	とても実感 できている	まあ実感 できている	まあ実感 できている	まあ実感 できている	どちらとも いえない	どちらとも いえない	実感 できていない	実感 できていない
こうありたい自分	実感 できている	どちらとも いえない+ 実感 できていない	—	—	—	—	—	—	—
お金がある	—	—	実感 できている	どちらとも いえない	実感 できていない	—	—	—	—
自分の健康	—	—	—	—	—	実感 できている	どちらとも いえない+ 実感 できていない	—	—
家族・知人の健康	—	—	—	—	—	—	—	実感 できている	どちらとも いえない+ 実感 できていない
人 数 ※	23	34	60	231	39	73	55	35	42
幸福度平均値	0.43	1.01	0.48	0.52	1.38	0.71	1.15	1.30	1.41
分 散 値	6.22	5.59	5.58	5.26	4.72	4.97	4.38	4.80	3.67
順 位	①	④	⑤	⑧	⑫	⑩	⑭	⑪	⑱

※欠損値(無回答)があるため、合計は1182人にならない

いと思っっているような自分である」「自分自身の健康が良好である」という質問が、分類に資することが示されている。

参考までに紹介すると、最初に男女別に分けてから、幸福条件を当てはめるケースについても分析を行っている(表6)。詳細は省略するが、男女ともまず、「よい家庭」要因が高い有意性を持ち、その水準が高いもの順に、女性はや年齢、お金、大切な人の幸せ要因が重要という結果となった。一方、男性の場合には、こうありたい自分、お金、自身の健康、家族の健康要因が重要という結果であった。

考察

以上、幸福感を切り口にCELのデータを分析することができた。まず、幸福感と生活満足度という類似の指標との比較を通じて、幸福感の持つ総合性を確認した。また、幸福感を感じるための条件を集計することで、社会全体では、健康、愛情、お金、人間関係、自己実現、社会といった優先順位の存在の可能性を検出した。

幸福度の指標化を考える際、GDPでは賄えない幸福をもたらず要素の顕在化ができたとともに、それを客観的に捉えることに対する課題も認識した。

さらに、このデータを、今回の特集の柱である世代、年齢階層という切り口で分析を行った。その結果、「よい家庭」即ち、愛情という要素は、

世代を超えた普遍性を持つことが分かった。一方、世代間で比較すると、「お金がある」「友人関係が良好」「自分の大切だと思っっている人が幸せ」といった要因は若年層が相対的に重視する項目であった。中には性別も加味すべき要因があり、「自分がこうありたいと思っっているような自分である」は20代女性が相対的に強く重視しているといった特徴が見られた。

反対に、高齢者層は「健康」「近隣との関係」という身近な関心事、あるいは「よい社会と納得」という公的な意識に相対的な重みを与えているという特徴が見られた。

さて、ではこのような要因に対する現在の充足感と、総合的な幸福感との関係はどうなっていたか。前節では決定木分析によって、幸福度の水準をグループ分けすることを試みた。すると、有意で有効な分類項目として、「よい家庭が築けている」という愛情要因が抽出された。また、それが満たされている程度に応じ、「自己実現(自身がこうありたい)」「要因、「お金」要因、「自身の健康」要因、「家族の健康」要因の順に、2次的分類が可能であることが計算結果として出てきた。そして、2次要因の結果によっては1次要因での順位が逆転する場合があることも確認した。

加えて年齢階層別の決定木分析を行った場合、統計上は30代以下と40代以上の2つに大別された。30代以下グループは「自分の大切だと思っっている人が幸せである」と「よい家庭が築けている」という質問が、分類に効果的であることが分かった。

一方、40代以上層に対しては「よい家庭が築けている」の満足度が高い順に、さらに「社会から評価されている」「自分自身がこうありたいと思っっているような自分である」「自分自身の健康が良好である」という質問が、分類に資することが示されている。

このように、今回のデータ分析によって、幸福度の構造を解析するための手がかりを、いくつか得ることができた。また、回答者を同質な1つのグループとして取り扱うのではなく、年齢や性別で志向や特徴の異なる多母集団と見なすべきではないかとの示唆も得た。

若年層の幸福感が、家族要因や関係の深い人の幸福などと、強く相関しているという事実は、彼らの生活充足の多様性の発見でもあった。一方で、公的な事柄に対する関心の低さを改めて確認した。

今後は、より多様な属性データを用いて、幸福感の背後にある影響要因を精査すること、ひいては、この幸福度に何らかの構造が存在し、それをモデル化することができるといふかについて取り組むことが課題である。

(※1) 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)ウェブページ内 ディスカッションページ(10-05)および(10-06)は、紙幅の都合上、本稿で取り上げることのできなかった。幸福論に関する議論の蓄積(展望)などを論じており、本稿を補完する論者と位置づけている。

(※2) ※1と同様にディスカッションページ(10-04)「CEL生活意識調査分析(経済社会、生活充足度)」世代視点」にて取り上げている。

http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/CEL/issue/discussion/1190234_2040.html